



地域医療と暮らしのゆくえ 超高齢社会をともに生きる

高山義浩

多死時代のプライマリ・ヘルスケア
その答えは暮らしのなかに

世界の貧困、紛争をうけてさすった若者が、医師となって、
都市・低地で若月第一の職に出会った。
沖縄にあって地域医療の現場にあり、時に霞が関のミッションを帯びて奔走し、
どの現場でも汗をかき続けるその目に、
「地域包括ケアシステム」の実像はどうか。
この書のかたちをどう捉えているのか——。日々の診療の傍ら、月刊「病院」、
朝日新聞医療サテライト「アピタル」など多方面に発信する著者による、
現代に思いを馳せたいすべての医療者に捧げる提言の書。 医学書院

地域医療と暮らしのゆくえ 超高齢社会をともに生きる

高山義浩＝著

本体1800円＋税
医学書院 ☎03-3817-5657

答えは暮らしのなかにある

諸外国に例をみないスピードで高齢化が進んでいるわが国では今、「地域包括ケア」という言葉が飛び交い、各地域の現場が戸惑う様子だけが見え隠れしている。そんな世相のなか、時宜を得て発行された1冊である。バックパッカーとして世界の貧困・紛争地帯をさすらった経歴をもつ著者が、「農民とともに」の精神で地域医療の実践に尽くした佐久総合病院の若月俊一氏と出会い、医師として奔走するようになった経歴が本書の背景にある。

多死時代のプライマリ・ヘルスケアのあるべき姿をみつめ続けた著者は言う。

「その答えは暮らしのなかにある」と。在宅看護の道を

30年以上歩いている私は、その言葉に頷ける。原っぱに寝そべる子どもたちの笑顔の表紙からは、その暮らしぶりと彼らのこころの風

景が伝わって来て惹かれる。本書は、豊富な事例とコラム、各章の末尾の施策が活き、著者の感性がここそこに小気味よく溢れ、温もりが伝わってくる。革新的な医療技術の進展は住民に過剰な期待を抱かせ、治癒よりも生活を優先した医療を求める声が数多く聞かれるようになっていたなか、関係者は皆、今一度、退院後の生活にも関心をもとて警報を鳴らしている。それぞれの専門性を活かしながら、支え合い、活かし合うことで社会を循環させ、価値を生み出していかなければと説かれる。

コラムでは、アラビアの旅先で緊急入院した不安と寂しさのあまり、パニックに陥り体が震えていた著者が、ナースのさりげない関わりを受けて眠りについた逸話が紹介される。それこそが看護の真髓だと思わず頷いた私だった。またカンボジアでの体験として、患者に「息を吹きかける」リー先生に弟子入りを志願したコラムが読まれ、その話に溶け込んだ私にも幼少の頃の経験が蘇った。「痛い」とこ、飛んでく！。あの息が飛んでくようだった。「施策」での例示は読者の創造力を高める。トータルな町づくりを住民参加のもとにめざしてゆく必要性の示唆には、思わず頷いてしまった。

「老衰死」を社会で進めるしかけ

地域包括ケアという理想像、その価値が明らかにするのはこれからで、自分の考えや思い、願いを重ねて読むと、じつに有意義である。2025年にピークを迎えるとされる超高齢社会、そのとき病院に何ができるか。ある写真に添えられたフレーズがある。「患者さんが紡ぐ物語に寄り添うためには、医療者として共有的時間、語り合える時間が大きい。しかし、もう1つの物語に触れることができるのは、主治医であっても一瞬のことに過ぎない」。この一節に、ヒントが潜んでいるように思う。自らの老後も2016年現在と同様の社会サービスが受けられると夢見ているとしたら……。著者の視点は鋭い。団塊世代が「伝説の世代」となり得るかどうか。今一度、延命医療だけでなく「老衰死」を社会全体で進めるしかけを準備しておくと団塊ジュニアに囁かれた、私はそんな気がした。本書は、地域の総合的な発展の一部としての地域医療、これからの地域創生のヒントが含まれている。医療者だけではなく、超高齢社会を真摯に生きようとするすべての人々に、多くの示唆を与えてくれる確かな1冊である。